

## ソサイエティの自律が促す 学会の発展

基礎・境界ソサイエティ会長 大石進一



ソサイエティの独立採算化を含め、その自律が一層進んでいる。基礎・境界ソサイエティでは、解説論文を中心として、ソサイエティの連携を図る電子ソサイエティ誌である *IEICE Fundamentals Review* を昨年7月より季刊で発行開始した。IEEE Proceedings や SIAM Review を範として、学会誌よりも詳細かつページ数も潤沢に取った解説記事をフェローや適切な方に執筆して頂き、研究会の横顔など親しみやすい記事とともに掲載している。また、ソサイエティ内の新規事業を提案ベースで募集し、ソサイエティ誌の発刊準備や国際会議における博士課程学生セッションの補助、外国人学生の母国語による紹介記事を学会ホームページ内に置くなどの事業を既に着手した。このように、ソサイエティの活動は独立採算という枠内で活性化している。

ソサイエティにカウントされる事業において一番大きなものは論文誌の発行である。我が学会の英文論文誌の総ページ数は既に和文論文誌のそれを大きくしのぎ、かつ英文論文誌への投稿が一番多い国は日本ではなくなっており、その国際化が著しい。その主たる理由は電子情報通信分野におけるインパクトファクターを持つアジアで数少ない論文誌であると同時に査読期間が短いという優れた特徴を持つことによる。博士学位を取得する際に、一流の雑誌に何編か採録されていることという内規を持つ大学院が(少なくとも日本では)非常に多い。世界最高の雑誌に投稿したくとも、そこでの査読期間は平均的に2年程度かかり、更に印刷まで一年程度かかる。これでは、学位の必要条件のための論文を書くには遅すぎる。我が学会の雑誌は永い伝統のもと、一流誌にランクされ、かつ3か月で査読を終えることを目標としているので、博士学位取得の必要条件のためには非常に好都合である。すなわち、博士製造のために、我が論文誌が繁栄している面があることは事実であろう。筆者はこのことは日本のために少し不幸なことでもあると思っている。博士取得の必要条件から「結果をまとめた論文が論文誌へ採録されていること」を外すべきではないか。ドイツなどはそうなっていると聞く。そうすれば、博士課程の学生の成果であっても、素晴らしい内容であれば世界最高の雑誌に論文を投稿することができる。我が学会が4分冊からなる英文論文誌を発行したのは大変な英断であった。そして、10年以上たって、上記のような国際化の時代を迎えた。次の段階は、電子情報通信の分野の素晴らしい研究成果を得たら出すべき世界最高の雑誌の一つにすることであろう。

ソサイエティのもう一つの大きな事業は研究会である。研究会の活動は大変活発で、毎月近く開催され、日本の様々な地域で開催されて日本中の研究者と研究会を通じて知り合うことができるようになってきている。そこで発表される内容は討論によって磨かれる良き仕組みである。また、研究内容は時に海外に情報が漏らされ、盗まれることもあるが、紳士協定を信じ、研究会は運営されている。その研究会も、近い将来、国際化や研究会技報の電子化は必然の方向である。そのときには、研究会の良き伝統を保ちつつ、研究会技報と論文誌の位置づけを明確にし、相互の発展はどうあるべきかの結論が得られている必要がある。

そして、ソサイエティのもう一つの大事業は、ソサイエティ大会である。ソサイエティ大会は、情報系ソサイエティが情報処理学会と合同で開催するなど、各ソサイエティ独自に企画を進める方向になりつつある。私見であるが、各ソサイエティがソサイエティ大会の独自化を推進することが、ソサイエティ活動の活性化の鍵ではないかと思っている。例えば、ソサイエティ大会を国際会議とすることも可能な方向性の一つと思う。

ソサイエティは電子情報通信学会という大組織において小回りが利くようにした知恵である。各ソサイエティが独自の発展をしつつ、連携していくダイナミズムが学会の発展に必要である。